

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第八十三卷「芸術、文化、言語、文学（二の三）」

言語と精神、身体（一）

器質、認知、記憶、見当識、知性に関わる言語障害

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第八十三巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、言語と精神、身体の関係、とりわけ、器質、認知、記憶、見当識、知性に関わる言語障害に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

知覚と言語との関係を考える

アスペルガー症候群・失読症・離人症体験

創作言語スラフォーリア1・サヴァン症候群

スラフォーリア2・共感覚者の言語観

重度の共感覚者・自閉症者などに頻出する英語の「間違い」

第三編 三十歳～三十九歳

「岩崎式日本語」適性セルフチェックテスト

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

知覚と言語との関係を考える

二〇〇七年六月一日 起筆、攔筆、公開

時々、共感覚を持たない方から、「本当に音に色が見えたり、文字に色が見えたり、景色から音が聴こえたりするのか」と尋ねられますが、結論から言うと、本当に見えたり聴こえたりしません。

人間は、大人になるにつれて、ニューロン同士のつながりが非常に限定的・合理的になり、それで社会生活がスムーズに送れるために、そちらのほうを「知覚の健全な状態」であると感覚するわけです。「可視光線↓視覚」「音波↓聴覚」「圧力の変化↓皮膚感覚」といった具合に、脳のはたらきそのものが分化するために、我々はそれぞれに対して「見る」「聞く」「触る」という動詞を当てるわけです。

しかし、音に色を見る共感覚者は「音波↓視覚」、景色に曲が浮かぶ共感覚者は「可視光線↓聴覚」という知覚体験をするわけです。から、「見る」「聞く」という動詞の扱い方そのものを疑ってみる態度が必要です。ここに、冒頭の質問の難しさがあると僕は思います。

僕の場合も例外でなく、自分の知覚現象を表現するためには、「聞く」「聴る」などの新単語を生み出さなければならぬという、もはや笑い話にもなりそうな状態ですが、しかし、そもそも人間の知覚というものは、生まれつきは皆そうであるわけです。そこに、成長するにつれて余分なニューロン同士の断絶というものが起きて、「あ」という形の文字は「あ」という音で発音する、という「常識」が構築されるわけです。

最近、博学な方々と話をする中で、「言葉にするとはどういうことだろうか。」「頭の中で考えていることを削減することでしょう。」というような会話をします。いくら言葉で表現しようとしても、すでに既存の言葉で表現できないものを知覚するなり、考えている人の場合、言葉の無力さというのが、致命的なものとして前提にあるものです。

しかし、だからこそ100%には達しなくても、頭の中の思考を99%は体外への表現として形にしようと努力して、言葉の力を身に付け続けることは必要だと思います。

ただ、そこで「若者はもっと本を読むべきだ」と言うのは短絡だというのが、僕の思うところです。我々共感覚者や、世の中の自閉症患者、失読症（ディスレクシア）患者は、「文字を読む」こと一つにおいて、文字情報以外のことを敏感に知覚するわけですから、「若

者はもつと本を読むべきだ」と言うよりは、「本に書かれているようなことをもつと勉強すべきだ」という言い方こそが、今後の障害者に優しい社会のためには必要だと思えます。

今の僕の世代や、それ以下の子ども世代には、それとは逆のことが起こっている気がします。「ちよー（超）」という言葉がその典型だと僕は思っていて、「とても」「かなり」「非常に」「大変」「超越した」「相当な」といった言葉を、全て「ちよー」という一単語で済ませしてしまうのは、すでに「ちよー」において思考しているからだというのが、今の我々の世代の思考の正体でしょう。若者が考えていることよりも、日本語の語彙のほうが、実際にはずっと豊かなのだと思います。しかし、それは人間の知覚と言語のあり方としては、大変に危険な状態です。

（最近、彼らは彼らで「ちよー」に微妙な変化を付けているのだろうか、という話になりましたが、なかなか面白い話で、しかし、もしこれが真であれば、今の若者は、「でつちぼうこう」「おいらん」「えど」「とても」といった日本語よりも、英語の微妙な母音の発音や、中国語の声調のほうが、簡単に体得できたはずですよ。）

僕が日本の古典語や世界の哲学書を読むように心がけている理由は、一つには自らの共感覚を表現しうる言葉の力が、過去の文献の中にあるだろうと、密かに期待しているからに他なりません。古典語に

並外れた教養のあった三島由紀夫に、共感覚があったかどうかは分かりません。しかし、その土地と文化圏に栄えた言語（＝母国語）の膨大な語彙体系が、自分が考えていることの総量に満たない、という感覚は、実は人間にとって大切なことでしょう。だからこそ、「母国語への愛着」や、「母国語を用いて自分の共感覚や知覚や芸術観が語れるかという試み」に、意味が出てきます。

言葉の無力さを痛感しつつ、なお言葉を大切にする人間もいれば、言葉を極度に簡素化して、それにおいて思考しているがゆえに、それ以外の言葉が本当に日常会話に出てこない人間もいます。特に僕の世代や、それ以下の若者が、そのどちらか真つ二つになっている理由の一つには、やはり五感の衰退、共感覚的なもののとらえ方と思考の衰退というものが、潜んでいるように思えます。

冒頭のようなせつかくの質問は、僕みたいに、「アスペルガー的傾向」がありながらも、自分の共感覚に対して自覚を持って言語化できる人間には、答え甲斐があつて良いでしょうが、本当に悩んでいらつしやるアスペルガー症候群・高機能自閉症・ディスレクシア患者の方々の心は傷つけることになるかもしれませんね。難しいことです。こういう質問は本当に紙一重なのです。

アスペルガー症候群・失読症・離人症体験

二〇〇七年六月二十九日 起筆、擱筆、公開

ここ数年、共感覚を告白するようになって以来、様々な分野の専門家・研究者の方々から、僕が共感覚だけでなく、アスペルガー症候群（高機能自閉症）、失読症、離人症性障害などといった他の症状も合併して持っているのではないかと、専門的見地から言われるようになりました。

以前から、こういった症状（僕は個性や感性と言いたい）については、おそらく”客観的に”見れば、自分はそうであろうという判断で、共感覚とともにずっと調べてきたことであるので、驚きはしません。やはり、なんだか苦笑するとともに、僕の性格上、「簡単に人の個性に病名を付けるものじゃないだろう。僕だったら、離人症と言わずに、離人状態と言う。」と心の中では思っています。（しかも、他に僕が”個性として”持っている閃輝暗点・不思議の国のアリス症候群などは、まだ日本の多くの専門家や医者が知らないので、正直言って不自由しています。何でもかんでも「〓症候群」と名付けたために、いったい世の中にいくつの「〓症候群」があるのか分からないのは、ちよつと滑稽なのではないか？）

僕にとって、共感覚もその他の症状も、「〓症候群」「〓病」などと

名前が付く以前の、たった一つの壮大な実感なのであって、僕自身は僕が「病気である」などという考えは、一切持っておりません。

何より、「いや、僕よりももっと努力・苦勞している人は世界にたくさんいるはずだ。」「いや、重度の自閉症の人たちは、それらを自らの個性や感性だと主張する言葉・コミュニケーション自体を持たないのだから、言葉をせつかく持っている自分は、その人たちのためにも、〓症候群”と呼ばれることを、心の底では拒否し続けよう。」の思いがあつて、このブログを書いているわけです。「科学的でないと言われようとも、僕が書いていることは、全て実体験から書いている、生身の人間の証言である」ことに意義があるのであって、その意味で、「〓症候群」「〓病」といったものは、あとから僕の感覚や「個性のある」人たちの感覚を、ただ便宜的に呼んだものにすぎない、というのが僕の基本スタンスであることだけは、申し上げておきたいです。

しかしながら、自分の持っている共感覚や症状を正直に言えば言うほど、脳活動の計測や、その他の実験への協力を頼まれることが増えてきて、それに対して、のんきな哲学的信条を語って辞退し続けることがどこまで可能なのか、自分はどういう立場で共感覚や人間の知覚という問題に取り組んでいくべきなのか、まだ考えている最中です。

さて、共感覚関連の実験なり質問紙において、必ず聞かれることに、「あなたは失読症との診断を受けたことがありますか？」というものがありません。「診断を受けた」ことではないので、「いいえ」ではあるものの、実際は先述の通りというわけです。その都度、「いいえ」の後にその旨を英語で書いて情報提供するという、何ともややこしいことを繰り返しています。

僕がなぜ、いわゆる自閉症の方々でさえ持たないような多種多様な共感覚を、知能に何の影響もないうままで保持し得ているのか（前々回のブログ参照）、典型的な失読症の症状を持っているのに、どのようにして、こうして文章が書けるまでに失読症を克服したのか、典型的な離人症性障害であることは明らかなのに、それをどうコントロールしているか、自分（自我）と他人（他我）との区別を付けるためにどんな努力をしたか・・・、そのあたりが、専門的見地から見て実に不思議とのことで、従来に見たことのない稀有な状態にあるようです。

ただ、僕にとっては、「そう言われても、それは本質に関わることではないな。」という思いでして、これが自分のごく普通の知覚の仕方だと思ってきた（苦労はあったが）ために、何とも奇妙な気分なのです。もちろん、言語の習得の仕方や、時空の認知の仕方、音楽の聴き方が、周りの子供と違っているという事は、幼少より自覚し

ていたことは確かです。とにかく、僕の基本スタンスは、「全ては個性である。」ということ、ただそれだけです。それを前提において、少しかだけ語ります。

「どうやって克服したか」との問いに、多くの強度の共感覚者や失読症者・高機能自閉症者は、「横柄な言い方かもしれないが、自分の努力で克服したとしか言いようがない」と答えるそうですが、それは横柄どころか、紛れもない確信であって、恐縮ながら、僕もこの言葉を借りておくことにします。

さて、例えば、僕の失読症（に該当する）体験を挙げてみます。「あ」という形の文字は、もちろん「あ」という音声で読むのですが、これができなくなることがあります。子どもの頃は、より頻繁に、連続的に起こっていました。（ただし、失読症の診断基準として、「あ」の形と「あ」という音声のそれぞれ単独では理解できていることが必要です。）

読書中や、何か大事な書類などを書いている時や、電車の発車時刻表を見ている時などに起こると、冷や汗ものですが、今現在では自分でコントロールできるほどに克服しているので、共感覚を用いたり、体験的に身に付けたある方法によって集中力を保っておけば、自分としては問題はありません。しかし、以前は、本の読み方が分

からなくなったり、行を飛ばしても気付かなかつたり、一文を理解するのに数分かつたりしたので、そのたびに「あ」は”あ”と読むのだ、「い」は”い”と読むのだ、と言い聞かせつつ、奮闘したものです。

僕の場合（おそらく、多くの失読症の場合もそうでしょうが）、この「失読症発作」とでも言うべき状態にある時、「あ」という文字の形が、そばに置いてある花瓶の形、窓から見える木々の佇まい、道路を走る車のデザイン、それらと同じただの「形」として目に映るわけです。花瓶の「形」が「かびん」であるわけではないのと同じです。そうして、一時的に「あ」が”あ”と読めなくなるということが起こります。（ただし、漢字は読める。仮名と、外国語の音標・表音文字の読解にのみ影響が出る。）

失読症は、いわゆる健常者からすれば、「障害」と映るかもしれませんが、（世の中の失読症者の面目を保つためにも言っておきますが）それは間違っているでしょう。（本当は「失読状態」というネーミングにでも変更すべしとさえ思います。）

むしろ、「あ」の形が、文字・記号という特殊な価値としてでなく、花瓶の形と等価であるように視覚化されるという感覚は、言語を獲得する前の、人類本来の能力であって、いかに言語文化・言語コミュニケーションというものが、余分な脳の配線の断絶を繰り返すこ

とによって成立するものであるかが分かります。

「あ」を”あ”という音声のみでとらえるためには、例えば「あ」を甘いケーキのような味の文字であるにとらえたり、”あ”を青色の音声であるにとらえたりするような、共感的な脳内のパイプが断線していなければなりません。特に表音文字言語ではそうです。表音文字言語圏で、失読症が多いことには、理由があるわけです。

僕にとっては、なぜ「あ」の形を”あ”という音声でしか感じ取ることができない状態に、圧倒的多数の人間の脳が合理化・単純化するのか、逆にそうはならない人がごく少数ながら存在するのはなぜか、という問い自体が、共感覚や失読症を超えた根本的な問いとして、ずっと追いつきたいテーマであるのです。

実は、この問いは、幼少よりずっと主体的・意識的自覚として持っていました。これを言うと、あまりにも驚かれますが、むしろ、共感覚者や失読症者にとっては、「あ」は”あ”である以前に、（連想や想像ではない、実際の知覚として）「青色」であったり「甘い味」であったりする、つまり、音波が視覚野に入ったり、電磁波（可視光線）が聴覚野に入ったりする体と脳を持って生きているわけですから、こういった問いが小さい頃から湧いてくるほうが普通であるときえ思います。

さて、アスペルガー症候群と離人症性障害については、詳しく書けませんでしたが、いずれにしても、共感覚と関連して、こういった周辺の話題は徐々に取り上げていければと思います。

とにかく、失読症というのは、そのように「病気である」とのニュアンスで呼ぶから「失読症」なのであって、僕の中では、「共感覚」という壮大な感性に生きる中でごく自然に陥る、ある人間らしい現象の一つに過ぎません。だから、「〴〵症候群」「〴〵病」については、徹底的に勉強はするけれども、知識として徹底的に得るだけで、それらを知ったからと言って、僕の感覚・感性に変化が出るわけではないので、本質的に意味があるわけではありません。

創作言語スラフォーリア・サヴァン症候群

二〇〇七年八月二十五日 起筆、攔筆、公開

●ここ最近、創作が滞っていますが、僕の創作言語を少し紹介してみます。

僕は小学生の頃から、自分で言語を創作して遊ぶのが好きでした。その頃はもちろん、文法などはいい加減でしたが、高校や大学の頃は、真面目に創っては破棄を繰り返していました。意味内容の伝達

はもちろんですが、「言語が一つの音楽となること」「そのまま音楽になるような言語を創ること」を念頭に置いていたし、思えば（小学生の頃は別として）一つのれっきとした芸術なのかもしれません。（ただし、自分の芸術作品に使ったり、夢の中で登場しているだけですけれど。）このスラフォーリアも、僕の理想郷のようなもので、もっと語彙を増やして、一つの辞書でも作れば面白いだろうな、と思っっていますが、流動的なまま、ずっと止まっています。

日本語の美しさばかりを語っている、僕のいつもの文章と矛盾するようですが、しかし、例えば「鶯の鳴き声（という音楽）が好きなのに、なぜわざわざ作曲をしないと気が済まない人間が、確かに存在するのだろう。」と考えると、答えが見えてくるような気がします。それはおそらく、鶯の鳴き声に心奪われるがゆえに、かもしれせん。

◆スラフォーリアの特徴・・・「スラ（清楚にして壮大な・穏やかに能動的な）、フォーリア（生き方・運命・命・人生・血流・感動）」

○活用・響き・文法などにおいては、古典日本語を母体とする膠着語で、母音調和がある。

○母音は五個で、ほぼ全て開音節で発音し、アクセントは高低アクセントである。

○主語・修飾語・述語の語順である。主語と目的語は、文脈によって省略できる。

○ブーバ・キキ効果などは考慮に入れる。

○人称・単複による動詞の語尾変化がなく、多くの助詞・助動詞を持つ。

○文字体系は、「フイ」「スイ」の音を一文字にするなど、整理するまで、現代カタカナで代用。ただし、理想は表語文字と音標文字との併用。

◆人称

○一人称 ウイウ（私）、ウオグ（僕）、ウインタ（私たち）

○二人称 ナトウラ（あなた）、トル（君・お前・坊や・男）、コル（君・娘さん・女）、ナトウラタ（あなたたち）、トルタ、コルタ（君たち）

○三人称 カウラ（彼）、カウノレア（彼女）、カウラタ（彼ら）、カウノレータ（彼女ら）

○コザ（これ）、ウオロザ（あれ）、イエザ（それ）、ドウザ（どれ）

○（ウオグン） コル スイロアセンヌ。「僕は君を愛している。」

○（ナトウラン） ウイウオ スイロアセンニフィス。「あなたは私を愛しています。」

○ウイウン ナトウラ スイロアセンニフィリス。「私はあなたを愛していますわ。」

○ウイウン ナトウラ スイロアセンニタン。「私はあなたを愛していた。」

○カウラン カウノレア スイロアセンニタンラン。「彼は彼女を愛していただろう。」

○カウノレアン カウラ スイロアセンニタンフィセラン。「彼女は彼を愛していただでしょう。」

○カウノレアン カウラ スイロアセンナズナタンフィセラン。「彼女は彼を愛していませんでした。」

○ネス カウラン カウノレア スイロアセンナズナタンハ、（カウノレア） イトリエラジュサズナタンフィリセラン。「もし彼女が彼女を愛していなかったら、彼女は生きられなかったでしょうね。」

○コザ スウォンノア ソリテ、ウオロザ スイヨツオア ソル。

（これが三個あって、あれが八個ある。）

ドウザ ネンノア ソルR （どれが何個あるって？ Rは疑問符。）

○ウオグン コーゾ テミドワー ルテクリジエラジュサラン。

（僕はこの道を歩き続けられるだろう。）

○カウノレア ノウイチ フェリネシタンフィリセラシ。 （彼女はとも傷ついたでしょうね。）

◆動詞・助動詞の活用

○（左から、「愛する」「生きる」「歩く」「食べる」「傷つく」「書く」「続ける」）

未然 スイロアセンナ イトリエラ ルテクラ ベサ フェリネサ
 クワシヤ ジエラ
 連用 スイロアセンニ イトリエリ ルテクリ ベシ フェリネシ
 クワシ ジエリ
 終止 スイロアセンヌ イトリエル ルテクル ベス フェリネス
 クワシユ ジエル
 連体 スイロアセンヌ イトリエル ルテクル ベス フェリネス
 クワシユ ジエル

已然 スイロアセンネ イトリエレ ルテクレ ベセ フェリネセ
 クワシエ ジエレ
 命令 スイロアセンネ イトリエレ ルテクレ ベセ フェリネセ
 クワシエ ジエレ

◆曜日

日曜日 フィニーブ
 月曜日 ウオロテイーブ
 火曜日 ケヘチーブ
 水曜日 スラシューブ
 木曜日 メホトーブ
 金曜日 チエレキーブ
 土曜日 ヨトウーブ

◆数字

0 ウオノン
 1 シー
 2 カヘ
 3 スウオンノ

4	イエリ								
5	サミュツア								
6	ネオール								
7	セレキ								
8	スイヨツア								
9	クメルタ								
10	シュノー								
11	シュノ シー								
12	シュノ カヘ								
13	カヘ シュノー								
14	カヘ シュノ シー								
15	カヘ シュノ カヘ								
16	スウオンノ シュノ								
17	シウオン								
18	サミュツア シウオン								
19	スウオンノ シュノ								
20	スイヨツア								
21	シュセノン								
22	シロムノン								
23	シュノ シロムノン								
24	シロムノン								
25	シュセノン シロムノン								
26	シラウオン								
27	トラキウオン								
28	カヘ								
29	トラキウオン								
30	サミュツア								
31	シュセノン								
32	シウオン								
33	クメルト								
34	スウオンノ								
35	スイヨツア								
36	シュノ イエリト								
37	セレキ								
38	シュセノン								
39	セレキ								
40	シ								
41	ウオン								
42	ネオール								
43	シュノ								
44	スイヨツア								
45	カヘ								
46	テウロス								
47	スウオンノ								
48	トウヒレ								
49	サミュツア								
50	カヘ								
51	バンタス								
52	スウオンノ								
53	トウヒレ								
54	ネオール								
55	リーヌ								
56	スエトーヌ								
57	スウオンノ								
58	テン								
59	シー								
60	イエリ								

●数字の話で思い出したこと。

共感覚関連の本を読んでいると、僕がこのブログでも時々挙げていたアスペルガー症候群や偏頭痛などと並んで、しばしばサヴァン症候群が挙げられています。ある特定の分野に限って驚異的な記憶力・学習能力を持つ人のことを指しますが、これら共感覚に関連して挙げられる諸症状のうち、僕が特に当てはまらないのが、このサヴァン症候群であるようです。

しかし、これもまた世の科学者が、僕の嫌いな「ナントカ症候群」という呼び方を使うから、壁ができてしまうのであって、僕に全くその傾向がないかと言えば、そうでもないのかもしれないです。

中学生の頃のいつだったか、電車に乗ろうとして、なぜか切符の買い方が分からなくなったことがありました。買い方と言うのが、一番安いルートがどうだといったことではなくて、160円だとか190円と書いてあるうちの、どちらの数字が大きいか分からない、どれを押せばよいか分からない、つまり数字の読み方が一瞬分からなくなるというものでした。

今現在は、そういったことはなくなりましたが、数字に対する執着心と恐怖心の拮抗というのは、小学生の頃がピークだったように思っています。おそらく、僕の中では「数の概念が分かる」とは、「2+3

||5が分かる「ことではなく、一●●十●●●●||●●●●●●●●が分かる」ということだった、つまり「文字を介さない発想で数学を解いていた」ので、空間図形の答えは、瞬時に分かるか、そうでなくても得意であったのに、普通の2桁や3桁の計算はほとんど化け物か何かかにかに思えた時期がありました。高校に入ると、その症状はどこかに行ってしまったが。

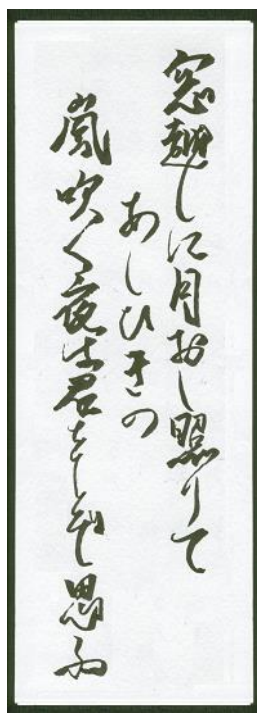
僕の通っていた大学の入試では、数学の問題が4問出るのですが、うち2問は自分が図形の周りを飛び回ったので、すぐに答えが分かっています。あとは途中の計算を書くのに時間を使ったという覚えがあります。にもかかわらず、日常生活のひよんなどところで、切符が買えないなんてことが起こって、冷や汗が出て倒れそうになる。自分は異常な障害者かと思ったこともありました。「切符事件」のときに耳に入ってきた、「切符も買えないなんて、どういう育ち方をしたんだ」という近所の人の言葉は、今でも覚えています。でも、こういう体験があったからこそ、「他の共感覚者をバカにはしないぞ。」という心につながっているんだと信じています。

それにしても、僕はカレンダー計算（何万年も後の何月何日の曜日を当てる、など）はできないし、円周率を何万桁も覚えた人を見てみると、純粋に尊敬してしまうわけで、僕はいわゆるサヴァン症候群と呼ばれるような天才などでは全くないと思う。（サヴァン症候群の人についても、僕は「努力の天才だ」と言いたいと思うけれど。）

「天才」という言葉は、なんだか「努力が面倒であるがゆえの、他人の持ち上げ方」のような気がして、僕はあまり好きではないんです。

スラフオーリア2・共感覚者の言語観

二〇〇七年八月二十七日 起筆、擱筆、公開



●創作言語の話をしていて思い出したけれど、有名な国際補助語と

して、エスペラントという言語がある。いつもの僕の視点とは逆の、超個人的・超民族的な視点から、僕自身の共感覚について何かが分かるかと思つて、一時期興味を持ったけれど、考案者のザメンホフ自身は、本当に真剣だったのだろうかと思う。

あのような人工言語が広く普及することは不可能だと思つし、現に不可能な状態にあるけれども、言語というものが体がそもそも「人工のもの」であつて、「人工言語」という言い方に疑問を感じるし、異国人・異民族間のトラブルを見続けて蓄積された悲しみが考案者の中にあつて、初めて共通語という発想が出てきた。どんな芸術にしたつて、言語にしたつて、根底に「個人の心の傷」というものがあることは、実はかなり重要だと思つ。考案者自身がそれを分かっていたので、エスペラントは母国語に代わる言語ではなくて、第二言語であるべきだというポリシーもすばらしかった。

それを考えると、そもそも色々な言語が長い年月をかけて生まれたきたそのプロセスに、一人で挑んだとも言えそうだし、その精神自体を後世の人がどうとらえるかが問題であつて、例えば今、「自分で言語を創作する障害者がいる。」なんて聞くけれど、僕は全く不思議に思わない。むしろ、「世界に対する正常な反応」ではなからうか。統合失調症患者の言語創作は、協調性の欠如・心の障害ということになつているが、全く逆だと思つ。

そこから、「従って、社会性がない。コミュニケーション能力がない。」という発想が出るならば、それは「共感覚を殺す」発想だと思ふ。それに、本当に母国語を理解していないと、言語を自分で作り出すことはできないように思う。逆に、自分で言語を作り出す人ほど、実は日本語に並外れた知識があったり、こだわりと美意識を持っていたりするのはなぜか。

僕はいつも、「本来なら、世界には六十四億通りの言語が存在するべきだからこそ、日本語の美しさが大切だ。日本語が美しいと思えるのは、個人の感性が日本語の美しさを最初から上回っているという切迫感があるからだ。」と、人にしつこいくらいに言ってしまう。感動されるか笑われるかの真つ二つだけれど、でも、それは紛れもない本心から言ってみている。超個人的・社会的存在である言語の中に、個人的・芸術的逼迫感をどう込めるかの難しさについて考え続けることは、僕は常に共感覚の中心的考察であつてよいと思う。

二葉亭四迷だったか、エスペラントの普及を推奨したようだし、僕も七月九日のブログで、「志賀直哉がフランス語を日本の公用語にしろと言ったのは、見当違いだ」などと気取って書いたけれど、少なくとも「日本語の音標文字化論」は、「日本語のプロ」だからこそ言えたことかもしれないという事は、一応、心に留めておこうと思う。(それでもなお、日本文化の美意識は、そんなに甘いものじゃない、フランス語や世界のいかなる言語でも代替することができない、

というのが、僕の実感なのだけれど。)

そもそも僕が思う「最も清く美しい言語」というのは、「以心伝心」だ。ところが、(人を見てみると)それを体で分かっている人は、実は言語(母語)を大切にすると人だということに気付く。

今どきの女子高生のメールに出てくる単語の数は、極端な場合、たった二十か三十しかないらしい。要するに、日本語を使い切っていないにもかかわらず、「言葉では伝わらない想い」なんて日本語で言う。それを書くときに、「コトバで伝わらないおもい」などと書く。つまり、「英語では伝わらない」もののあはれ”や”聞く”という動詞では伝わらない”音の色”という共感覚者の世界観とは根本が全く違う、相容れない造語法だ。逆に、知的障害者が力をふり絞って言う「あく」や「うく」の細かいニュアンスを聞いているほうが、細かな感情の違いが分かって安心する上に、すこぶる知性的に思えることがある。

先日も、電車の中で、障害者が懸命にコミュニケーションをとろうとしていた姿を見て、知性とは何かを考えた。いったい人間的だとか、感性的だとか、知性的であるとは、何のことを指すのだろうか。それを考え始めると、いつも不思議な気分になる。「共感覚の議論」と「言語の議論」は、実は必ず連動するものだと思っている。共感覚から生じる”僕だけの”個体的本質というものを、言ってみ

れば、普遍的本質と相容れさせることはできるのか。それができないから、共感覚者は苦悩するのかもしれない。

「重度の共感覚者・自閉症者などに頻出する英語の「間違い」

二〇〇九年六月七日 起筆、擱筆、公開

ちよつと面白い例を挙げます。

重度の共感覚者・自閉症者・解離性障害者・脳卒中患者などは、次の五つの例文のうち、下に行くほど理解が困難になります。多少、順番が変わることもあります。これは僕が考えた例文の一部で、色々な共感覚者・自閉症者との交流で見出したことです。こういったことは、重度の共感覚者以外については、すでに実証されているとされ、色々な論文を読んできましたが、重度の共感覚者についても同じことが起こることを発見したというのは、たぶん僕が初めてかもしれません……。しかも、重度の共感覚者・自閉症者に通じる言語まで自作しつつある人は、僕以外にはいないと思います。おそらくそこが（すぐに芸術に昇華しようとするクセが）、僕の論が学問よりも芸術に近いと言語学のプロの方から見られる点なのだと思いますが……。

●私は爪を切った。（「切る」対象が自分の身体の範囲内。）

●私は木の枝を切った。（「切る」対象が自然界。||自然を改変する自我を自覚。）

●私は髪を切った。（上の二文と同じ構造なのに、「切った」のは私ではなく美容師。||自我と他我、自分と他者の対立的自覚。中間構文と言う。）

●私は手紙の封を切った。（「切る」は比喩的で、ほとんど「開ける」「開封する」に近い。）

●私はAさんと縁を切った。（「切る」対象は目に見えない抽象概念で、重度の自閉症者にはほとんど理解不可能。）

（英語母語話者、及び一般の日本人が獲得する英語）

●I cut my nails. 「私は爪を切った。」

●I cut branches. 「私は木の枝を切った。」

●My hair was cut. 「私は髪を切った。」

●I had my hair cut. 「私は髪を切った。」

●I opened the letter. 「私は手紙の封を切った。」

●I broke off relations with A. 「私はAさんと縁を切った。」

（重度の共感覚者・一般の自閉症者・世界中の幼児（英語圏も）・解離性障害者・脳卒中患者などに見られる英語の間違い）

「私は髪を切った。」

●I cut my hair. （中間構文のつもり）「私は髪を切った。」

●I was cut my hair. （受動態のつもり）「私は髪を切られた。」

● I cut I hair. My cut me hair. Me cut I hair. (代名詞の自由な変更)

● My hair cut I. I my hair cut. (語順の自由な変更)「髪を切ったの、私。」「私、髪を切ったの。」

● I cut my hair. My hair cut.

(能動態と受動態の区別なし||中間構文||語順の自由な変更と同義)

● I am my hair was cut. (髪を切られた状態に今ある。)

ちなみに、僕の自作言語スラフォーリアは、これらの間違いが間違いにならず、全て

「私んの髪切りんたん。」

Wunno kami kirintan. (ウイウンノカミキリントン。)

となります。

ちなみに、英語圏の幼児は皆、先のような「間違い」の時期を体験することは実証されていて、言語学界でも多くの論文がすでに出ています。それらはほぼ全部読みましたが、どうしても物足りませんでした。

スラフォーリアのブログのほうは、ほとんど言語学のプロの方とのやり取りばかりなので、こちらには簡単な例を挙げていきます。スラフォーリアの言語観については、特にエスペラント・ロジバンな

ど人工言語関係の方から、新説になり得るというメールから、相当な批判メールまで、様々な反響を頂いております。批判を頂いているのは、僕が従来の言語学の能格と主格という概念を、共感者から見ればおかしいという観点から覆そうとしているところです。ただ、それが新説になり得るといふ人がいらつしやり、ただ公開するのはもったいないという意見があり、悩んでしまったので、とりあえずパスワードをかけてみました。・・・何を言っているのか分からなかったら、すみません。

前者の肯定的意見の場合、「重度の共感者・自閉症者・知的障害者には彼らなりの言語というものはあるはずだ。それを障害なき共感者が現代日本語で記述できるところに感動した。」という内容、後者の批判的意見の場合、「人間は、共感覚・自閉症・知的障害→英語の世界認識という進化の過程を辿るべきで、やはり共感者や自閉症者というのは、正統な言語認識に乗り遅れた人たちのだ」というニュアンスの入った内容です。人それぞれで面白いと思います。僕は前者の信念を曲げないで行きたいと思っています。

詳しいことは、スラフォーリアのブログのほうの上級解説(19)にあります。

「岩崎式日本語」適性セルフチェックテスト

二〇一七年三月十九日 起筆
試使用中、公開準備中